

社会福祉士国家試験対策とその支援の実績と課題

— 2020年度受験者へのインタビューを通して—

浜内 彩乃
西川 ゆかり

キーワード：国家試験対策，オンライン資源，インタビュー

京都光華女子大学社会福祉専攻では，社会福祉士の国家試験合格者を向上させるためにさまざまな試験対策支援を行ってきた。そして2020年度はコロナ禍となり，新たなシステムを組まずに用いることができるオンライン資源と既存の国家試験対策，その支援とを組み合わせて実施した。本論ではこの新たな取り組みが学生の国家試験に対する勉強への姿勢や受験勉強にどのように影響したのかを，合格者5名と不合格者2名にインタビュー調査を実施し要点をまとめた。その結果，受験生の気持ちの変化は【強制力のあるものに頼る段階】【自主学習を短時間開始する段階】【本格的に試験勉強を行う段階】があり，次の段階に進むための【切り替えスイッチ】があった。また良かった点としてはオンライン資源でも対面資源でも【個別対応】【質問のしやすさ】【みんなの様子が見れる（リアルタイムZoom）】が共通してあげられ，オンライン資源のみ【自分のペースで学べる】があげられた。

I. はじめに

社会福祉士の国家試験は，1989（平成元）年に第1回目が行われ，以後，年に1回，1月下旬から2月上旬のいずれかの日曜日に実施されている。試験は，共通科目（午前）と専門科目（午後）に分かれ，共通科目11科目，専門科目8科目の計19科目を受験する。合格するためには，問題の総得点の60%を基準として問題の難易度で修正された点数以上の得点を取り，かつ全試験科目において得点を取る必要がある。

社会福祉士の国家試験の受験資格を取得する方法は，福祉系の大学を卒業するルートや実務経験を規定年数積むルートなど，全部で12のルートが設定され

ている。2003年度から京都光華女子大学でも社会福祉士の養成を開始しているが，福祉系大学等で指定の18科目を履修することで受験資格を取得できるルート（以下，福祉系大学等ルートとする）で受験資格取得を目指す。厚生労働省（2021）が発表した第33回社会福祉士国家試験学校別合格率によると，この福祉系大学等ルートは受験者受験資格獲得校全体の51.0%を占め12ルートの中で最も受験者数が多い。さらに第33回国家試験受験者を出している福祉系大学等ルートの大学は全部で233校にのぼる。これらの大学はそれぞれ社会福祉士の国家試験合格に向け，独自の対策に取り組んでいる。

社会福祉士国家試験の歴代合格率はおおよそ22%～31%で推移しており，新卒合格者は統計がとられた第20回から30%～58%で推移している。しかしこの合格率は，必ずしも受験者受験資格獲得校の偏差値と比例しているわけではない。受験者数が10人以上いる福祉系大学等ルートで新卒者の合格率上位校には，国公立大学に混ざって「大学受験パスナビ（全国の大学入試情報を掲載しているサイト）」で2021年8月時点で偏差値35～37.5である私立大学が2校入っている。この2校の新卒受験者の合格率は83.3%，91.9%といずれも高い数値となっている。

京都光華女子大学が初めて受験生を出したのが2007年に実施された第19回社会福祉士国家試験である。合格率は学科や専攻の変遷があり，現在の社会福祉専攻ができるまでは，年代によって合格率が0%～30%とばらつきが大きく，押しなると13%ほどであった。社会福祉専攻が創設され，受験対策支援がより強化されたのは2018年（第30回）からで，そこから合格率は44.4%（第30回），35.7%（第31回），35.4%（第32回）と向上したものの，伸び悩んでいる。京都光華女子大学社会福祉専攻の偏差値は既出サイトで35ではあるが，先述した高い合格率の大学の偏差

値と大差はない。田中ら（2019）は、今日の学生における様々な課題を提示しつつも、学生らは「単にこれまでの人生のなかでまとまった勉強をする機会がなく、勉強のやり方が確立されていない場合など、大学側からの少しのサポートで飛躍的に成績が向上する場合がある」としている。つまり、大学側のサポートを工夫することで、合格率を高められる可能性が十分にあるということである。

京都光華女子大学社会福祉専攻では、合格率を向上させるために教員らが国家試験対策とその支援についてさまざまな工夫をおこなってきた。例えば4年生の国家試験対策の授業として社会福祉学特講（前期、後期、夏季集中、通年集中）を開講していることがあげられる。一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟（以下「ソ教連」）に加盟している大学は2021年11月現在264校あるが、社団法人日本社会福祉士養成校協会（2014）によれば、授業時間外に独立した講座を実施しているところが多く、「国試」受験対策講座を正規の授業として開講している大学は28.3%と決して多くない。また本専攻ではそれに加え、自主勉強会、複数回の模擬試験の実施、外部講座の受講などを実施してきた。

そして2020年度は、コロナ禍という不測の事態にみまわれ、受験学年（4年生）を対象とした従来の国家試験対策とその支援の実施が困難となった。そのため新たなシステムを組まずに用いることができるオンライン資源（YouTubeやZoom、光華navi）を活用しつつ、既存の国家試験対策やその支援と組み合わせることで、この事態を乗り切った。このコロナ禍で行われた第33回の合格率は38.5%となり、大幅な合格率の向上には至らなかったものの、歴代で2番目の合格率となった。

本論では、2020年度に行ったこの新たな取り組みが学生の国家試験に対する姿勢の変化や受験勉強にどのように影響したのかをインタビュー調査して、国家試験対策とその支援において有効な手立てを検討することを目的とする。

II. 取り組み

京都光華女子大学のこれまでの取り組みと合格率を概観したうえで、国家試験対策とその支援で用いたオ

ンライン資源と、既存の国家試験対策とその支援について説明する。なお、本論で用いる「オンライン資源」とは、インターネットにつながっている状態で用いる国家試験対策とその支援を指す。オンライン資源は、主にYouTubeやZoom、光華naviとする。また対面資源は、学生と直接顔を合わせて実施する国家試験対策とその支援を指し、対面での授業や面談等とする。

1. 社会福祉士国家試験合格率の推移

京都光華女子大学が社会福祉士養成課程を創設したのが2003年度であり、この頃は福祉ブームで全国に多くの社会福祉士養成課程が誕生していた。京都光華女子大学では社会福祉学科として開設し、当時は80名の定員数だった。そして2006年度社会福祉士養成課程の1期生65名の学生が社会福祉士国家試験を受験し、そこから毎年社会福祉士の受験生を出している。

開設から数年は受験生も多かったことから、教員一人当たりの学生数が多く、個別対応も困難であったと推測される。そのため、外部の受験対策講座が導入されたが、学内での試験対策とその支援の体制が体系だてて構築されておらず、合格率も20%台にとどまった。

その後、福祉ブームが落ち着き、入学者数の減少に伴い、学科の変更が行われ、2010年度入学生より社会福祉学科がキャリア形成学科に吸収され変更された。キャリア形成学科では入学前から社会福祉士を目指す学生が多数いるわけではなく、入学後に社会福祉士課程を選択した学生のみが国家試験を受験した。その時期、国家試験の受験者数と合格率が大幅に減少している。その背景として、元来、入学時に社会福祉士を目指す学生であっても、国家試験に対するハードルの高さを感じるものだが、入学後に目指す学生であれば、受験し、合格するモチベーションの維持はより困難になったのではないかと推察される。

そして2014年度入学生より、新たに医療福祉学科社会福祉専攻が開設された。定員は40名で、そのほとんどの学生が社会福祉士を目指して入学をしてくる。2012年より学内での国家試験対策の主軸となる社会福祉学特講が前期・後期授業期間に開講され、その後、授業数や開講時期が試行錯誤された。そして2017年度より社会福祉学特講を前期・後期授業と集中講義とで開講することになり、現在とほぼ同様の体

系となった。さらに2018年度からは現在と同様の開講となった。医療福祉学科社会福祉専攻になってからの受験資格取得者が受験した2017年度以降、合格率30%以上を維持している。

表1. 社会福祉士国家試験合格率の推移

年度	国家試験回数	全国合格率	福祉系大学 新卒合格率	本学 受験生	本学 合格者数	本学 合格率
2006年度	第19回	27.4%		65	3	4.6%
2007年度	第20回	30.6%	33.3%	57	9	15.8%
2008年度	第21回	29.1%	39.9%	58	13	22.4%
2009年度	第22回	27.5%	35.0%	38	8	21.1%
2010年度	第23回	28.1%	38.9%	27	8	29.6%
2011年度	第24回	26.3%	38.5%	20	4	20.0%
2012年度	第25回	18.8%	31.4%	23	1	4.3%
2013年度	第26回	27.5%	41.7%	13	3	23.1%
2014年度	第27回	27.0%	45.4%	18	3	16.7%
2015年度	第28回	26.2%	58.4%	6	0	0.0%
2016年度	第29回	25.8%	46.3%	9	1	11.1%
↓医療福祉学科社会福祉専攻での受験資格取得者↓						
2017年度	第30回	30.2%	54.6%	18	8	44.4%
2018年度	第31回	28.9%	53.7%	14	5	35.7%
2019年度	第32回	29.3%	56.0%	17	6	35.3%
2020年度	第33回	29.3%	50.7%	13	5	38.5%

2. 2020年度開講の「社会福祉学特講」について

京都光華女子大学社会福祉専攻では、社会福祉士国家試験対策の一環として「社会福祉学特講」を正規の授業として開講している。「社会福祉学特講」全体の授業テーマとして、これまで学んだ社会福祉専門科目について、具体的事例を通して、社会福祉専門職として必要な支援の技術、知識を確認し、また、国家試験の事例問題を主として取り上げ、国家試験受験への意欲を高めること、としている。「社会福祉学特講」にはⅠ～Ⅳの4種類があり、それぞれ時期や内容、形態は異なるが、すべて15コマの授業を実施している。2020年度はコロナ禍となり、対面授業での全回実施が困難となったことから、オンライン資源と対面資源を合わせての実施となった。以下、「社会福祉学特講」Ⅰ～Ⅳの概要を説明する。

(1) 社会福祉学特講Ⅰ（4年次前期）

「社会福祉学特講Ⅰ」（以下、「特講Ⅰ」）は4年次の前期授業期間に週1回1コマ、合計15コマの授業を実施した。この科目は1名の専任教員が担当した。2020年度はこの「特講Ⅰ」授業開始時期から、コ

ロナ禍の影響により学生が大学へ来られない状態となった。そのため、国家試験対策をオンラインで実施した最初の授業である。具体的には、光華naviの小テスト機能を用いて社会福祉士国家試験の過去問題を90分で90問解くよう設定した。また光華naviの学生コメント機能を用いて学生に課題を与えることも授業の一環としていた。

(2) 社会福祉学特講Ⅱ（4年次前期集中）

社会福祉学特講Ⅱ（以下、「特講Ⅱ」）は、4年次の夏季休暇期間に集中講義として実施した。1日のコマ数は年度により異なるが、2020年度においては1日2コマ～3コマとし、6日間に分けて合計15コマの授業を実施した。なお、この特講Ⅱに関しては、社会福祉専攻専任教員5名が授業コマ数を分担し、感染対策に留意しながら対面での授業をおこなった。

具体的には、社会福祉士過去問題を使った一問一答を学生に解かせ、各担当教員が解説をした。

(3) 社会福祉学特講Ⅲ（4年次後期）

社会福祉学特講Ⅲ（以下、「特講Ⅲ」）は、4年次の後期授業期間に週1回1コマ、合計15コマの授業を実施した。2020年度は、模擬試験の結果別に2クラスに分け、それぞれ1名ずつの専任教員が担当した。6コマは模擬問題を実施し、4コマは模擬問題の解説を各クラスに分かれてZoomを用いてオンラインにて実施した。実施した授業を録画し、YouTubeにて配信することで、他のクラスの授業も見られるようにした。2コマは合同でグループワークを行い、各クラスの学生同士の交流や情報交換を行った。1コマは社会福祉士を現役合格した卒業生に来てもらい、1年間どのように勉強していたのか、方法やモチベーションなどについての経験談を聞く時間を設けた。残りの2コマは本番同様の問題数を解く模擬試験を実施した。

(4) 社会福祉学特講Ⅳ（4年次通年集中）

社会福祉学特講Ⅳ（以下、「特講Ⅳ」）は通年の集中講義科目であり、2020年度は11月～12月にかけて1日3コマ、5日間、合計15コマの授業を実施した。1名の専任教員が担当し、2日間をオンライン授業、3日間を感染対策に留意しながら対面授業とした。具体的には、模擬問題の実施とその解説を行った。

3. オンライン資源について

(1) 光華 navi

京都光華女子大学では、学生の学びをサポートする光華 navi というオンライン資源を活用している。光華 navi は、授業の履修登録や時間割の確認、シラバス閲覧の他に、授業の出欠確認、アンケート機能や小テスト機能、課題の提出、学生から担当教員への連絡などができる。京都光華女子大学では2007年12月から光華 navi を導入しているが、2020年度はコロナ禍の影響で多くの科目がオンライン授業に切り替わり、例年以上に光華 navi を活用した授業が実施された。その中でも、社会福祉専攻が国家試験対策とその支援で使用した資源について詳しく説明する。

①小テスト機能（4年次前期）

光華 navi の小テスト機能は、学生がパソコンやスマートフォン、タブレット端末などから光華 navi にログインし、テストを受験するための機能である。学生は、履修している授業の担当教員が事前に光華 navi 内に作成している小テストを受験する。受験できる時間の指定や制限時間を設けるか否かなど、担当教員が設定を変更することができる。「社会福祉学特講」では、決められた日時に小テストを受験するよう学生に指示をしており、決められた日時にしか受験できないよう設定していた。小テスト終了後は学生自身で結果を確認することができ、すぐに小テスト内容を振り返ることができる。

②学生コメント（4年次、1年間）

光華 navi にはクラスプロフィールという授業を管理するための機能がある。その中に課題提出をするための機能があり、教員が課題を配信し、学生が課題を提出する。学生が提出した課題に対して教員がコメントすることができる。「社会福祉学特講」では毎回この機能を用いて学生に課題を与え、提出させることも授業の一環としていた。学生自身の振り返りができるよう、学習方法や自身の状況、困りごとなどを記載して提出させるという課題内容である。必ず一週間以内に教員がコメントを返すという方法をとっていた。

(2) Zoom（4年次、1年間）

リアルタイムのオンライン授業は、WEB 会議システム Zoom を用いて行った。Zoom はビデオ会議やチャットを使った文字のやりとりができる。「社会福祉学特講Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ」では、Zoom を用いた。学生の

音声はオフ、カメラはなるべくオンにするよう指示し、学生の様子をうかがいながら授業を実施した。また参考 URL をチャットに入力して学習を深められるようにし、後に学生が復習できるよう配信するため、授業は基本的に学生の許可を得た上ですべて録画をした。

(3) YouTube（4年次、1年間）

オンラインの授業内容を Zoom で録画し、オンラインの動画共有サービス YouTube で配信した。動画の URL を知っている人しか見ることのできない限定公開として配信し、学生に光華 navi を用いて URL を共有した。

4. その他の国家試験対策とその支援

(1) 自主勉強会（4年次、前期）

授業外の時間に、自主勉強会を Zoom にてオンラインで開催していた。自主勉強会では主に「特講Ⅰ」の小テストで実施していた過去問題の解説を行った。自主勉強会は希望者のみ参加することができるようにし、講義内容を録画して YouTube にて配信も行った。配信することで、都合がつかず参加できなかった学生や、復習したい学生が動画を視聴できるようにした。

(2) LEC 東京リーガルマインドの外部講座（4年次5月～7月）

京都光華女子大学社会福祉専攻では、社会福祉士国家試験対策の一部を、外部業者へ委託している。社会福祉士養成課程の1期生が受験した2007年度（当時は社会福祉学科）より、外部業者の力も借りながら国家試験対策に取り組んでおり、講座の受講形態や外部業者などの変更を経て、現在は LEC 東京リーガルマインド（以下、「LEC」）の講座を採用している。通常 LEC では、5月から7月に19コマの講義と、年間3回の模擬試験を実施している。LEC は毎年対面で開催していたが、コロナ禍の影響により2020年度はオンラインでの録画配信による実施となった。模擬試験については、1回目はオンラインで実施し、2、3回目は京都光華女子大学にて対面で開催した。

学生に対して受講必須とはしていないが、できるだけ受講するよう呼び掛けている。2020年度は、社会福祉士国家試験受験予定者13名全員が受講した。

(3) 模擬試験（4年次、8月、10月、11月、12月）

模擬試験については、上記で述べた LEC の模擬試験年3回の他に、外部模試を年1回取り入れている。

2020年度は中央法規出版の社会福祉士模擬試験を実施した。社会福祉士国家試験受験予定者13名全員が京都光華女子大学にて対面で受験した。

(4)社会福祉士受験対策セミナー(4年次10月~12月)

毎年、京都府社会福祉協議会が、社会福祉士受験対策セミナー(以下、「いとう総研」)を開催している。このセミナーは、有限会社いとう総研の代表取締役、伊東利洋氏を講師に招き、10月、11月、12月にそれぞれ1日ずつ行われている。京都光華女子大学では毎年このセミナーの受講を学生に勧めており、2020年度は3名が受講した。

Ⅲ. インタビュー調査

1. 研究対象者

研究対象者は、第33回社会福祉士国家試験を受験し、2021年3月に京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻を卒業した者7名(以下、卒業生)とする。

2. 研究方法

研究協力の同意が得られた卒業生のうち、合格者5名(2020年度合格者全員)、不合格者2名にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は2021年6月にZoomを使って実施した。質問項目は「受験勉強を行う上で有効だった勉強方法について」、「大学での受験対策支援の中で役に立ったものは何か」、「オンライン授業と対面授業の違いについて」、「社会福祉士国家試験受験勉強中の気持ちの変化」などである。インタビュー内容は同意を得た上で録画をした。インタビュー時間は30分~60分程度、半構造化面接にて実施した。

3. 分析方法

卒業生へのインタビュー内容の逐語録を作成し、研究者2名によってカテゴリ化及び、ラベリングによる要点の整理を行った。

4. 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮は、京都光華女子大学研究倫理委員会による倫理審査の承認を得た(承認番号:112)。卒業生に対して、研究の趣旨や調査方法、参加の自由

意思と不参加による不利益が生じることは一切ないこと、個人が特定されないことなどについて説明した。なお、利益相反に関する開示事項はない。

さらに論文作成後、抽出した調査対象者の語りについて確認してもらい、論文公開について文書にて了承を得ている。

Ⅳ. 結果

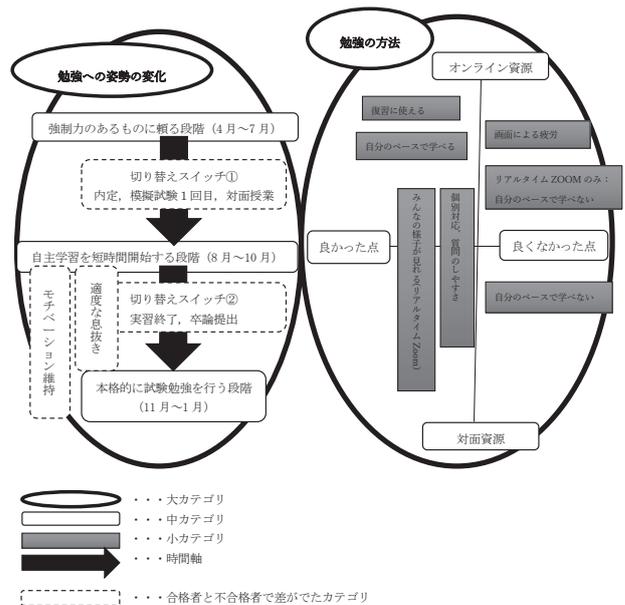


図1. 受験生の勉強への姿勢と勉強方法についての検討結果

1. 合格者の語りのカテゴリ化及び、ラベリングによる要点の整理

合格者の逐語録をカテゴリ化及び、ラベリングによる要点の整理を行い、合格者のインタビュー内容を【勉強への姿勢の変化】と【勉強の方法】という大きく2つにカテゴリ化した。

(1) 勉強への姿勢の変化

【勉強への姿勢の変化】は、さらに【強制的なものに頼る段階】、【自主学習を短時間開始する段階】、【本格的に試験勉強を行う段階】と3つにカテゴリ化し、要点を整理した。

【強制的なものに頼る段階】では、「(勉強の)やり方も分かん」「全然進まん」「心が折れて」など自主的な学習は困難であり、「自分一人でやるのは大変だけど、学校が出してくれるからそれをやる」「毎週テストがあったってこと自体は勉強を続けるあ

れ（意欲）にはなりました」「やらなあかんっていう目的があるんでやりやすかった」等、授業という枠組みの中で実施したものに頼る様子が語られた。そこから【自主学習を短時間開始する段階】は、「授業の模試をちょっと復習して」「過去問をやったり教科書見たり」等、自主的に勉強に取り組み始めるものの、短時間に留まる語りがあった。【本格的に試験勉強を行う段階】は、「過去問の3年分を〇×関係無く、どこがあつてどこが間違ってるかっていうのをやりました」「最後はほんとに過去問をひたすら解いて（中略）ノートにブアーって書いて（中略）先生を頼って」「先生に、これで大事なとこ教えてくださいって、いとう総研の冊子から星3を全部つけてもらって、そこをとりあえずやる」等、学生自ら積極的に教員に質問をしたり、試験勉強を本格的に行っている様子が語られた。

そして、【自主学習を短時間開始する段階】では「ちゃんとやるぞって決めたのは9月くらいから」「本格的に自分でやらな一ってなったのは（中略）7月8月くらい」等と夏休み前後にこの段階に入ったとされる語りが集まり、【本格的に試験勉強を行う段階】では「やりはじめたのは11月から」「ほんとにガチでやり始めたのは11月」「本格的には11月終わりとか12月入ってから」等の語りが集まったことから、【強制力のあるものに頼る段階】のラベルに（4～7月）を、【自主学習を短時間開始する段階】のラベルに（8～10月）を、【本格的に試験勉強を行う段階】のラベルに（11月～1月）を付け足した。

【強制力のあるものに頼る段階】から【自主学習を短時間開始する段階】に移行するきっかけとして「本格的に自分でやらな一ってなったのは4年の就活とかが終わってからです」と就職が内定したことや、「（頑張ろうと思ったのは）模試の結果を受けてです」と1回目の模擬試験の結果、「直接大学行って直接対面で会うっていう事もやる気が入ってた」「友達も頑張ってるし、私も頑張ろう」と対面授業が開始されたこと等があげられ、これらに【切り替えスイッチ①】とラベリングした。

また、【自主学習を短時間開始する段階】から【本格的に試験勉強を行う段階】への移行の際に「（本格的に勉強を）やり始めたのは11月とかで、それまでは実習と卒論を言い訳にしていた」「（本格的に勉強し

出したきっかけは）卒論が終わったからです」等の語りがあり、これらに【切り替えスイッチ②】とラベリングした。

【自主学習を短時間開始する段階】から【本格的に試験勉強を行う段階】にかけて「友達と遊んで、授業でも会って」「（バイトが気分転換に）なってたと思いますね」「遊んだりとかはしてた」等といったことが語られており、それらを【適度な息抜き】とラベリングした。また、「（模試の結果を見てモチベーションがあがった？）はい、あがりました」「模試の結果が（中略）頑張った結果ついてきてるって思って、それでモチベーションは保ってました」「毎日勉強してる自分かっこいい！」等、試験勉強への意欲を維持する語りがあり、これらに【モチベーション維持】とラベリングした。

(2) 勉強の方法

【勉強の方法】については、【オンライン資源】と【対面資源】のカテゴリに加え、【良かった点】と【良くなかった点】についてもカテゴリ化した。【オンライン資源】はZoomのオンライン授業やYouTubeでの授業配信、光華naviの小テスト機能や学生コメント機能、LECの配信授業について語られたものとした。対面資源は、特講で実施した対面授業や対面の個別指導、いとう総研など、直接学生と教員、講師が対面したものについて語られたものとした。

【オンライン資源】の【良かった点】については、動画の配信について「YouTubeで0.5倍速とかでゆっくりしゃべってもらって」「ちょっと倍速にして見たりとか」「集中力切れたなと思ったらそこで止めて、休んでまた見たりとか、自分の好きなタイミングとかで見れたんで、配信の方は好きでした」「自分の好きな時間に勉強できるんで」「普通に見てたら時間絶たんから、1.75倍とか1.2倍とか、バーって喋ってもらってやりました」等の学生が自身の勉強ペースに合わせて学習できた点について語られたことから【自分のペースで学べる】とラベリングした。また、「後で、あれ？ここどうやっけ？っていう時に聞き返したりするのは結構役立ちました」「（特講の授業動画は）結構何回も見てました」「一回聞いただけでは、ん？ってなるから、2～3周して」「（YouTubeは2～3回見ました」等、授業後の復習に用いていたことから【復

習に使える】とラベリングした。

【対面資源】とリアルタイム Zoom の【良かった点】は共通しており、「周りに友達とかも会えて、休憩時間とかも話したり」「みんなのやりとりも見れる」「他の子の意見とか聞けるのは良かった」等、周りの様子を見るのが語られていたため【みんなの様子が見れる】とラベリングした。また、対面資源のみの良さについては、2つにカテゴリ化した。1つ目は、「先生とかに、これがなんで違うのか分かりませんって聞きに行ったりしてました」「対面の方がすぐに先生に質問とかもできる」「学校やったら分からんときに、先生ここ分からないですって直接言いに行けたりしてた」「自分も聞きたかったけど聞けなかったところとかが（友達が聞いてくれるから）聞けたりする」等、教員への質問のしやすさについての語りで、【質問のしやすさ】とラベリングした。そしてもう1つは、「一対一で最後の締め」「冊子から星三つを全部つけてもらって、そこをとりあえずやる」「先生が相談に乗ってくれた」「学校で授業無いときでも分からなかったら聞いて」「先生が面談しようって言ってくれて」「過去問といて分からんところは聞く」「みっちりマンツーマンでの時間もあっての勉強見てもらって」等、教員が学生のニーズに合わせた個別対応を行ったことへの語りであり【個別対応】とラベリングした。

一方、【オンライン資源】の【良くなかった点】については、「パソコンで問題を解くっていうのは途中で気がどっかにいってしまうから」「パソコンに向かってやるのがめっちゃ苦手で」「私的にはこれ(パソコン)が合わない」「画面見るのもめんどくさーみたいな」「(携帯でやると)字が小さすぎて集中できない」「ずっとパソコンの前で聞いているのがしんどかった」等、パソコンや携帯電話などオンライン資源を活用するための電子機器についての不満をまとめ、【画面による疲労】とラベリングした。

また、【オンライン資源】の中ではリアルタイムの Zoom 授業についてのみ、「リアルタイムだと途中でん？ってなった時もあった」「きちんと聞いているのがしんどい」「集中力も続かへんかった」等の語りがあり、これを【自分のペースで学べない】とラベリングした。また、対面資源でも「解くことに必死になって覚えれなかった」「勢いが追いつけなかった」等の語りがあり、これも【自分のペースで学べない】とラベリン

グした。

2. 不合格者の語りのカテゴリ化及び、ラベリングによる要点の整理

不合格者の語りについてもカテゴリ化及び、ラベリングによる要点の整理を行ったところ、合格者の語りで行ったときと同じカテゴリ化とラベリングとなった。ただし、【切り替えスイッチ①】【切り替えスイッチ②】には、共に「(きっかけは)先生の厳しい言葉ですね」「(授業の中で)気持ちが切り替わるような言葉を言ってくださった」等と教員の言葉について語られており、これは合格者たちの語りにはないものであった。また、不合格者の語りには【適度な息抜き】や【モチベーション維持】にカテゴリ化できるものがなかった。

V. 考察

1. 既存の国家試験対策とその支援

2017年度には医療福祉学科社会福祉専攻となって初めての受験生となった。これにより、社会福祉士を取得するモチベーションが高い学生が多く入学してきた。同時に、社会福祉学特講が試行錯誤の末、今の体系とほぼ同様となる通常授業と集中講義となり、その相乗効果は顕著であった。田幡(2019)が常勤教員の配置とシラバスに明記された授業の有効性について述べているように、社会福祉学特講Ⅰ～Ⅳがシラバスに明記され、授業数や授業時期などが検討されていくなかで国家試験対策の主軸となったことは、合格率向上に大きく寄与したと考えられる。これらの授業が開講され、入学直後より社会福祉士を目指す専攻に移行したことにより、国家試験合格のために必要とされる知識の関連付けや科目間連携などの教育体制および教育支援(相良・南里, 2010)や、知識が十分に整理できていない学生に重要である箇所を指摘すること(小橋・竹嶋, 2014)が早期からできるようになったと考えられる。既に行われており、効果も認められているこれらの授業の活用は今後も国家試験合格率向上にとって要となるだろう。

2. 勉強への姿勢の変化

学生の勉強への意欲の変化は大きく3つの段階にカテゴライズした。【強制力のあるものに頼る段階】は「教科書を見る」「過去問を解く」といった勉強を始める姿勢はあるものの、「まだ200日ある!」と悠長な気持ちも大きい。そのため学校側が与えた授業や自主勉強会などに参加することが主となっており、受動的な勉強方法がメインとなっている。串崎・田中(2014)の研究では国家試験直前に行われた学習の結果ではあるものの、勉強方法がわからない学生に対して、段階的なステップを踏みながらも強制的に指導することの有効性が述べられている。こうした時期には、特講Ⅰのように毎週決まった時間に実施され、かつ強制的に問題を解かなければいけないという小テスト機能は有効だったと考えられる。

【自主学習を短時間開始する段階】は、「そろそろ(勉強しないと)やばいかなー」と感じて授業以外にも自主的に勉強を始めるものの、受験まで半年ほどあるため「今から2月まで勉強せなあかんのかー」と十分に集中しきれない様子があった。【本格的に試験勉強を行う段階】は、「あと3ヶ月くらいしかないから」と試験合格のために本格的な試験勉強を開始し、合格したいという意欲を高めていっている。

そして、【強制力のあるものに頼る段階】から【自主学習を短時間開始する段階】、【自主学習を短時間開始する段階】から【本格的に試験勉強を行う段階】へと次の段階に進むためには【切り替えスイッチ】が必要であった。4年生は、国家試験だけでなく、就職活動や実習(保育士や精神保健福祉士取得のためのもの)、卒業論文の作成など、複数の大きなイベントがある。これらのイベントは「卒論と実習を言い訳にして」と語られるように、勉強に集中しなくとも、他の大きなイベントに取り組んでいるという満足感を得てしまう。イベントを達成することで、そうした言い訳はできなくなり各学生の【切り替えスイッチ】となったのではないかと考えられる。合格者たちはこうしたイベント達成の区切りを【切り替えスイッチ】に上手く活用し、国家試験勉強への集中力を増していった。一方で、不合格者たちも、同様に【切り替えスイッチ】を同じ時期に同じように持っていたがいずれも「先生の厳しい言葉」など【教員の声かけ】を切り替えスイッチとしており、それが継続して与えられ続けないと集

中力を持続することが難しかったと推察される。

また合格者たちは、【自主学習を短時間開始する段階】から【本格的に試験勉強を行う段階】にかけて、勉強をつづけながらも、友達と遊んだり、適度にアルバイトするなど息抜きをしていた。さらに、模擬試験の結果によって自分の勉強の理解度や達成度を確認したり、勉強をしている自分を褒めるなど勉強へのモチベーションが下がらないようにしていた。一方、不合格者たちからは、そうした【適度な息抜き】や【モチベーション維持】についてはほとんど語られておらず、特に【モチベーション維持】については【教員の声かけ】が大きく影響していた。

これらの結果は、山本・酒井ら(2002)の「国家試験が近づくにつれて、国家試験勉強が、外的な報酬を得るためや、統制的なはたらきかけによって学習に取り組んだり、自尊心のために学習するのではなく、学習内容に価値や重要性を見出し積極的に取り組みだす」という研究結果とも関連していると考えられる。

3. オンライン資源の活用

2020年度は、開始当初からコロナ禍となり、京都光華女子大学がある地域にも緊急事態宣言が2回(4月と1月)発令され、大学での通常授業を継続的に行うことが困難となった。そうした中、大学では光華naviを主として、ZoomやYouTubeなどのオンライン資源を活用して授業を実施することになった。また、緊急事態宣言が解除された期間は、実習や演習など対面での授業が必要な科目のみ、大学に申請をし、マスク着用やアルコール消毒、検温などコロナ感染予防対策を万全に行ったうえで実施が可能となった。社会福祉学特講Ⅰ～Ⅳの実施を対面にするか、オンライン資源を活用しての実施にするかは、教員間で話し合われながらも学生がコロナ感染の心配を極力することなしに、かつ国家試験対策に集中できる方法を模索することになった。そのためオンライン資源の活用の有効性を事前調査するなどの準備はできておらず、その有効性よりも、コロナ感染予防対策を主としての実施であった。

その結果、学生らにとってオンライン資源の活用の良かった点は【自分のペースで学べる】【復習に使える】ことであることが分かった。講義を録画視聴できるものに関して、学生らは「0.5倍速とかでゆっくり」に

したり、「1.75倍とか1.2倍とかバー」とすすめるなど、各学生にとって丁度良い速度に設定することができたり、「(動画を)見て、集中力切れたなと思ったらそこで止めて、休んでまた見たりとか、自分の好きなタイミングとかで見れた」など自分の勉強ペースを守って勉強することができていた。これはまさにオンライン資源ならではの良かった点である。リアルタイム Zoom や対面授業では、【自分のペースで学べない】ことが良くなかった点としてあげられていることから、各学生が自分のペースで授業を受け、必要な時に必要なだけ復習に使うことのできるオンライン資源は国家試験対策において有効であるといえる。

その反面、オンライン資源は【画面による疲労】といった点があげられた。小田ら(2009)の研究でも「パソコンの画面を見て長時間勉強をすることは、身体的、特に視覚的に非常に困難であるという訴えが多かった」とされている。小テスト機能は、時間制限も設けることができ、強制力がある点は良かったものの、自分のペースで解けなかったり、こうした画面を見続けることによる疲労があったりすることは否めなかった。「パソコンを使って勉強をする、というスタイルがまだ浸透していない、という現実(小田・池田, 2009)」もあるだろう。八田・吉田(2021)が大学独自のシステムよりも「馴染みの深い外部アプリの方が頻繁に利用されていた」と述べているように、録画視聴のツールとして、学生にも馴染みがある YouTube を用いたことで、速度の調整を行うなどの操作がしやすく、視聴のしやすさにつながったのではないかと推測する。

オンライン資源を活用したものと対面授業の良かった点として出てきたのが【個別対応】【質問のしやすさ】【みんなの様子が見れる】であった。対面の場合には教員の研究室に個別で質問に来たり、個別面談を行って勉強方法やモチベーションの確認を行ったりした。この個別での質問や個別面談は、Zoom を用いて行った学生もいる。また、光華 navi の学生コメントから学生が困っていることや不安に思っていること、勉強方法について確認することができた。

光華 navi の学生コメントは、毎週授業ごとの課題として書かせていたため、強制的に教員と個別にやりとりを行うことになる。交換日記のようにやりとりを行うことで、教員は学生の状況が把握しやすく、必要

に応じて個別面談の声かけを行うこともできた。また、学生も教員がコメントで応答することにより「モチベーション保てた」「気兼ねなく相談できた」など、教員との交流を気軽に行えるという印象を持ったようである。また「直接質問に行けるタイプではなかった」というような学生にとっても質問がしやすい環境を与えることができた。さらに、越野(2019)は「早期からのメタ認知モニタリングの使用や、不適応な学習行動の修正等の指導が必要」としており、毎月「1か月の振り返り」や模擬試験の際に「何点か予測とその理由」といった課題を与えたことが「ちゃんと見返しか自分で振り返りで考えられる機会」としても機能したようであった。

一方で光華 navi の学生コメントは教員のタイミングでコメントを返すため、長い場合には1週間程度返事を待たせることがあった。そのため、授業後にすぐに教員に聞きに行けるという点では対面授業の方が良かったようである。いずれにせよ複数の先行研究が教員との面談や教員からの個別への働きかけが成績向上につながるとしているように(申崎・田中, 2014)(三井, 2013)(成田・宮本, 2021)、光華 navi や対面など、様々な方法で学生と交流し、働きかけられる機会を設けることが重要であるといえる。

また対面授業やリアルタイム Zoom など、リアルタイムで学生とやりとりしながら行う授業では【みんなの様子が見れる】ことが良かった点としてあげられた。オンライン授業では、「教室での授業と異なり学生同士での反応がわかりにくい(安藤・宮田, 2003)」ことが指摘されているが、全員のカメラをオンにし、オンライン授業でも学生を当てて回答を促したことで、対面授業でもオンライン授業でも「他の子の意見とか聞けるのは良かった」「友達も頑張ってるし私も頑張ろう」など互いの姿が良い影響を与えていた。

4. 総合的な考察

以上のことから、学生が国家試験勉強に取り組むにあたり、3つの段階があることが示唆された。そして段階ごとに勉強方法が異なること、段階が進むためには切り替えスイッチが必要であることも明らかになった。そして、オンライン資源を活用しての国家試験対策とその支援のメリット・デメリットも明らかとなった。オンライン資源のメリットとして挙げられた【自

分のペースで学べる】ことは、【強制力のあるものに頼る段階】では有効活用しにくいと考えられる。【強制力のあるものに頼る段階】の間に、各学生なりの勉強方法を身に付け、次の【自主学習を短時間開始する時期】に備えられるような支援が必要となるだろう。今回はその時期に、光華 navi の学生コメントを用いて、学生の勉強方法を確認し、それに教員がコメントをすることで対応をしていた。【自主学習を短時間開始する時期】では、【モチベーション維持】をどのように見つけ出すかがカギとなった。この時には、オンライン資源でも対面資源でも共に受験勉強を頑張っている仲間の様子を見聞きできる環境が重要となるだろう。田中ら (2019) らは、国家試験対策の先行研究をまとめ「グループ指導の必要性と重要性」について述べている。しかし唐沢 (2020) が述べるように、グループ学習は学生のモチベーションのばらつきや学生間での不満なども生じる。本研究においても「先生とか“みんなで勉強したらどう？”とかすごい勧めてくれてたんですけど、結構私動画とか一人で見たりする勉強法が好きやったんで」と語った者がいたように、グループ学習を好まない学生がいることも事実だろう。各自の勉強方法を進めながらも、他の学生の様子を見ることが出来る場は重要であり、週1回の授業が設定されていることが有効である理由の1つになっているのではないだろうか。この授業をオンラインで実施することになったとしても、同級生の様子が見えるようリアルタイムで実施し、かつ学生のカメラをオンに設定することが重要であると考えられる。

【本格的に試験勉強を行う時期】に、それまでの授業内容を改めて見返してみたいと感じる学生もいるだろう。4月から行った授業を録画配信し、受験当日まで自由に視聴できるようにしておくことで、その思いを叶えることができる。

学生への【個別対応】はどの段階においても重要だと考えられるが、段階によって個別対応の内容を変えていく必要があると考える。【強制力のあるものに頼る段階】では、教員は試験勉強に向かわせるために叱咤激励し、各学生の勉強方法を確認し、それについて指導する必要があるだろう。そして【自主学習を短時間開始する時期】では、学生が自分に合った勉強方法で学習を進められるようオンライン資源や対面資源など複数の選択肢を提供し、自ら勉強を進めて行けると

いう自信を持たせることが重要なのではないだろうか。同時に、勉強だけでなく、【適度な息抜き】ができていないかの確認も必要となる。この段階になっても学生が教員の叱咤激励を試験勉強のモチベーションとしてしまうと、【本格的に試験勉強を行う段階】に移っても、合格に至るまでの勉強を十分に行うことができないのではないだろうか。

【本格的に勉強を行う段階】になると、教員の大きな役割は【質問のしやすさ】を作り出すことだと考える。光華 navi やメール、Zoom での面談といったオンライン資源や授業前後での質問タイム、研究室への来訪など、各学生が「質問したい」と思った時にすぐに質問ができる環境を整えておくことも必要である。そして、この段階で学生が質問に行くことに対して自主的かつ積極的になれるような声かけや教員との関係づくりも必要だと考える。

また【切り替えスイッチ】を意図的に作り出すことについては今後試行錯誤する必要がある。大きなイベントが終わるという区切りが【切り替えスイッチ】となり、自発的な勉強意欲向上につながった学生と、そうではない学生との違いを調べることも重要である。いずれにせよ、就職活動や卒業論文など、国家試験以外の大きなイベントはできるだけ早期に終わらせ、国家試験勉強に集中できるように、計画を立て、計画を実現していけるような声かけを教員が行っていくことが重要であることは間違いないだろう。

VI. 課題

今回、初めてオンライン資源を活用した国家試験対策とその支援を実施した。しかし、それは事前に検討されて導入されたのではなく、コロナ禍という中で急遽取り入れざるをえない状況になったからである。そのため、今後の国家試験対策とその支援をバージョンアップさせるための一助を担ったものの、その効果を十分に発揮させることができなかった。そこで、今後はさらにオンライン資源と対面資源をより有効に機能させる方法を検討する必要がある。

さらに、今回はインタビューの調査対象者が7名と非常に少なく、十分なサンプルが採れたとはいえない。特に不合格者には2名にしか調査ができていないため、合格者と不合格者の違いを十分明確にしたとは

いえない。今後も国家試験受験後の学生に調査を行い、国家試験対策とその支援をより向上させていくことが必要であると考えられる。

VII. おわりに

コロナ禍という不測の事態に見舞われ、急遽オンライン資源を活用することになった。それにより、新しい国家試験対策とその支援を模索するきっかけとなった。オンライン資源と対面資源の両方それぞれに良かった点と良くなかった点が見いだされ、それぞれの良かった点を組み合わせ、学生の勉強の段階に合わせて導入していくことでより効果的な国家試験対策プログラムを構築できるのではないだろうか。教員にとっては毎年試行錯誤ではあるものの、学生にとっては在学中の受験はたった1回限りである。そのたった1回をベストな状態にもっていけるよう、最良の国家試験対策プログラムの構築を急ぎたい。

引用

相良かおる, 南里宏樹, 二木榮子, 甲斐達男, 水間智哉, 持田ヨシエ, 内岡三枝子, 坂巻路可 天本理恵, 井ノ口美佐子, 久保由紀子, 田川辰也 (2010) 『自律分散型国家試験対策の試み』 西南女学院大学紀要 Vol.14, 95-107.

安藤裕明, 宮田伸樹, 福原昇, 藤岡陸久 (2003) 『リアルタイム型遠隔講義と学生の反応, 平成15年度医学教育情報技術活用研究集会.』 <http://www.juce.jp/senmon/igaku/seminar/andol.pdf> (アクセス2021年7月29日)

大学受験パスナビ <https://passnavi.evidus.com/> (2021年7月25日アクセス)

唐沢博子, 板山稔, 藤田佳代子, 平井佳代 (2020) 『動画配信を利用した学生主体のグループ学習—看護学部2年次の国家試験対策の活動—』 目白大学高等教育研究, 26号, 23-30.

串崎正輝, 田中博司 (2014) 『学習意欲を如何に高め, 国家試験に全員合格させたか』 大阪物療大学紀要, 第2巻, 71-74.

厚生労働省 (2021) 『第33回社会福祉士国家試験合格発表 (参考資料) 第33回社会福祉士国家試験学校

別合格率』

三井明美 (2013) 『本学国家試験支援室から見た今後の国家試験対策で重要なこと (特集 2014年の国試に向けてできること)』 看護教育 54 (9), 798-803, 医学書院.

森田靖子 (2016) 『社会福祉士国家試験の変遷と通知等に見る行政指導—厚生労働省通知等からみた高齢者福祉分野科目の位置づけ—』 長野大学紀要, 第38巻第1・2号合併号, 21-29.

成田亜希, 宮本友弘 (2021) 『理学療法士国家試験対策における学習動機づけの調整スタイルの類型化とその特徴』 保健医療学雑誌, 12 (1), 52-61.

小田美也子, 池田隆幸 (2009) 『藤女子大学人間生活学部食物栄養学科における管理栄養士国家試験対策としての e-learning 使用の有用性の検討』 藤女子大学紀要, 第46号, 第II部: 11-17.

小橋一雄, 竹嶋理恵, 長谷川辰男, 大関健一郎, 船山朋子, 鈴木幹夫, 本間信生, 近藤知子 (2014) 『作業療法教育における本学独自の国家試験教育プログラムの開発』 帝京科学大学紀要 Vol.10, 43-49.

日本ソーシャルワーク教育学校連盟 会員校 <http://socialworker.jp/group/> (アクセス2021年11月12日)

社団法人日本社会福祉士養成校協会 (2014) 「社会福祉士養成新カリキュラムの教育実態の把握と, 社会福祉士に必要な教育内容のあり方に関する研究事業〈中間報告〉」, (公財) 社会福祉振興・試験センター助成金事業.

田幡恵子 (2019) 『大学における国家試験対策の教育実践—社会福祉士国家試験に臨む特別講義の効果と課題—』 鴨台社会福祉学論集, 27号, 44-54.

田中秀和, 田中央江 (2019) 『学生のエンパワメントを意識した国家試験対策の取り組み—立正大学における国家試験対策の取り組み—』 立正大学社会福祉研究所年報 21号, 137-155.

山本双一, 酒井寿美, 石元美知子, 石川裕治 (2002) 『国家試験受験学習に関する調査』 高知リハビリテーション学院紀要, 第3巻, 19-24.

八田武俊, 吉田貴博 (2021) 『臨床検査技師国家試験対策アプリの利用に関する報告』 岐阜医療科学大学紀要, 15号, 25-30.

謝 辞

本稿は、これまで国家試験対策とその支援に携わっていただいた京都光華女子大学の非常勤の先生方も含めたすべての教職員の力なくしては、完成することができませんでした。特に石井祐理子先生、田中希世子先生、南多恵子先生、千葉晃央先生には本稿を作成するにあたりご助言をいただきました。そしてコロナ禍での就職という大変な中、時間を作り、協力してくれた卒業生に感謝いたします。皆さま、誠にありがとうございました。最後になりましたが、コロナ禍という不測の事態においても、最後まで努力しつづけ、合格を目指した学生みなさんに敬意を表します。